

IV 大学における大災害時の帰宅行動に関する予備的アンケート調査

樋口 義治 (愛知大学)

1 はじめに

大規模災害において、人はどこにしようがまず自己の安全を図るであろう。なんとか自己の安全を確保した後、人は災害発生時間によってその後の行動を決めなければならない。夜間の時間であれば、余震の心配などを考慮して自宅にそのまま残る者、避難所その他に移る選択をする者もいるであろう。しかし、発災時が昼間の場合、多くの人は勤め先や学校に在るであろう。安全が確認され、帰宅のための道路や方法が確認された人は自宅を目指すであろう。しかし、多くの帰ろうとして帰ることのできない帰宅困難者や、職場や学校に留まることを余儀なくされた人が広範囲に出現したことは、2011年3月の東日本大震災での記憶が生々しい。

大災害が発生した場合、大学においてもこうした事態は当然予想される。東三河に所在する愛知大学においても、講義期間中で講義時間帯である昼間に南海トラフ級の大地震が発生して、かつ、津波が海岸部を中心に襲来した場合、多くの学生の帰宅が困難になることが予想される。こうした学生の大災害時における大学からの帰宅については、既にいくつかの調査がなされている。たとえば、森田(2013)によれば、ある大学における1,439名の学生の調査において、8割程度の学生が、大規模災害が発生した場合帰宅を望むが、帰宅手段が徒歩に限定された場合には、学内に留まることを選択する学生は6割弱となるという。こうしたことから、大災害発生前に学生や保護者の帰宅に関する意識やそれに伴う帰宅手段、住居地による可能性などを調査して、事前の対応策を立てておく必要があるであろう。

こうした問題意識から、今回、2017年において機会の得られた、学生の保護者、学生自身、そして高校生に対して災害時の帰宅や学内滞在について、予備的アンケート調査を実施した。

2 アンケート調査

目的: 南海トラフ大地震が昼間の講義時間帯に東三河を襲った場合、多くの学生において早急な帰宅が困難となる事態が想定される。こうした事態について、現在の時点における、学生、保護者の帰宅への意識を知ることを目的とする。

方法: 保護者 愛知大学豊橋校地において、2017年6月の大学主催後援会(父母会)において実施した。
学生 愛知大学豊橋校地において、2017年7月に実施した。

回答者数 大学生97人、保護者43人、総数140名であった。

アンケート内容 通学時間、安否確認、帰宅の可能性、帰宅が不可能な場合の宿泊先、大学への要望など自由記述であった。

結果：以下に示すが、必要のない項目については省いた。

【通学時間】

設問 あなたの（お子さんの）家から大学までの通学時間はどれほどですか。

①30分以内 ②1時間以内 ③2時間以内 ④3時間以内

表1

通学時間	大学生	大学生保護者
30分以内	37	11
1時間以内	21	10
2時間以内	38	20
3時間以内	1	1

表1に示した大学生の通学時間を見ると、58名が1時間以内である。38名が2時間以内であり、3時間以内も1名いる。この39名については帰宅方法にもよるが帰宅が難しいことが予想される。

【安否確認】

設問 災害時の連絡方法（安否確認）について、家族と（お子さんと）話し合っていますか。

①話し合っている ②話したことがある ③ない

表2 学生

通学時間	話し合っている	話したことがある	ない
30分以内	1	18	18
1時間以内	1	12	8
2時間以内	2	19	17
3時間以内	0	0	1
総計	4	49	44

表3 保護者

通学時間	話し合っている	話したことがある	ない
30分以内	2	5	4
1時間以内	1	7	2
2時間以内	4	13	3
3時間以内	0	0	1
総計	7	25	10

表3は学生について、通学時間と災害時の連絡方法（安否確認）についてクロス集計したものである。まず、①話し合っていると②話したことがある、を合計すると、53名（55%）であり、③ない44名（45%）よりも若干多いが、意外に災害時の連絡方法（安否確認）について話し合っていないといえる。これでは災害時に混乱が起きるのではないかと感じる。保護者の感覚としては、①話し合っている32名と、③ない10名であり、話し合っている意識が多いが、学生との間でずれがある。

【帰宅の可能性】

設問 最大級の大震災が東海地方を襲って、その時、あなたが（お子さんが）学校にいる場合（授業中・課外活動中）、地震が収まったあと、自宅に帰ることができると思いますか。

①帰ることができる ②すぐには帰ることができない ③当分帰ることができない

表4 大学生

通学時間	帰ることができる	すぐには帰ることができない	当分帰ることができない
30分以内	15	14	8
1時間以内	1	15	5
2時間以内	0	20	18
3時間以内	0	0	1
総計	16	49	32

表5 保護者

通学時間	帰ることができる	すぐには帰ることができない	当分帰ることができない
30分以内	7	2	2
1時間以内	0	9	1
2時間以内	0	12	7
3時間以内	0	0	1
総計	7	23	11

表4のように、この結果は注意が必要である。すなわち、総計でみると②すぐには帰ることができないと③当分帰ることができない、を合計すると81名（84%）、①帰ることができる16名（16%）となり、多くが帰ることがすぐにはできずと感じている。通学時間との関係で見ると、明らかに通学時間が長い学生において、帰ることができないと考えていることがわかる。また、表5の保護者も同じように感じていることがわかる。

【帰宅が不可能な場合の宿泊先】

設問 あなた（お子さん）がすぐには当分帰ることができない場合、どこに留まると思いますか。

①地域の避難所 ②大学 ③友人宅 ④知人宅 ⑤野宿 *複数回答あり

表6 大学生

通学時間	地域の避難所	大学	友人宅	知人宅	野宿
30分以内	13	29	4	1	1
1時間以内	5	19	4	3	0
2時間以内	14	30	14	3	1
3時間以内	0	0	1	0	0
総計	32	78	23	7	2

表7 保護者

通学時間	地域の避難所	大学	友人宅	知人宅	野宿
30分以内	5	5	0	0	0
1時間以内	0	6	4	0	0
2時間以内	3	18	4	0	0
3時間以内	1	1	0	0	0
総計	9	30	8	0	0

表6のように大学生では、複数選択ではあるが、①地域の避難所32人(23%)、②大学78人(55%)、③友人宅と④知人宅30名(21%)、⑤野宿2人(1%)であり、かなりの学生が大学に留まると予想している。地域の避難所は大学周辺の避難所を指すと思われるが、友人知人宅とほぼ同数である。時間による差はあまりない。また、地域の避難所より馴染みがあるのか、30分以内の近距離でも大学の方を選択する学生が多いようである。表7の保護者では、帰宅が困難な場合には、自分の子供が大学に留まることを望んでいるようである。

【保護者の自由記述】

保護者には震災時の大学への対応など自由に記述してもらった。その結果が表8である。総じて、災害時においては、状況や帰宅についての、大学、学生、保護者の連絡ネットワークの構築、災害時の避難所としての大学の活用とそのためへの備蓄品などの要望、そして、避難訓練を求めるものが多かった。

表8

避難訓練があると安心です。高校のように親へメールが来ると安心です。
携帯使用が不可能の可能性大ですので、安否確認について時間をとられずに確認がしたいです。例えばPCで大学のホームページで名前の確認だけでも取れると安心です。先生方職員の方も大変なときですが、どうぞよろしくお願ひ致します。
大学に食料、毛布など災害時に必要なものを保管して欲しい。

鉄道が再開されるまでかなり時間がかかると思うので、友人、知人のいる大学を避難所として頂きたいです。
体育館など雨、風をしのげる場所の提供。
備蓄や毛布などそろえておいてほしい。
緊急速報のようにメールなどが学校から飛んでくるといい。
安全に帰宅できるようになるまで、待機できるようにしていただきたい。
安否確認システムがどうなっていますか。水分や食料の備蓄はどうなっていますか。
交通機関等の情報をなるべく正確に伝えてほしい。
大学にてしばらくの間滞在できるよう、物資の確保をお願いしたい。大学周辺のハザードマップを配布して欲しい。
大学は地域の避難所に指定されていますか？避難訓練はありますか？子供と大学進学以降、話題にしたことがなかったので、今後について早急に話し合いたいと思います。
具体的な避難計画の案内および周知。
遠方より通学しており、学内の安全以外に、帰宅ルートの確保も心配です。交通機関との連携など、取組みがあればより安心できます。
子供（学生）、大学、保護者がネット（スマホ、パソコン等）で相互に安否確認ができるシステムがあればよいと思います。災害だけでなく、鉄道事故でも活用できるように。
迎えにくるまで待機させていただけるとありがたいです。
災害時に学内に留まる場所が子供に理解できるようにしていただきたいです。
大学独自で学生の安否情報を集約するというようなスキームはあるのでしょうか。
通学に2時間近くかかりますので、鉄道関係が復旧するまでは大学にいて欲しいと思っています。連絡等もその方がとりやすいと思います。近くに住んでいない学生を保護していただけると助かります。よろしくお願いします。
大学の場合、学校側でも対応して欲しい。
交通機関等、災害の程度などの情報が学生に正しく、速やかに伝わるように希望します。
大学内で安全な場所があれば、留まるようにして欲しい。
大学の方での対応の内容など、学生へ情報の周知徹底をお願いしたい。

3 おわりに

以上大災害時の帰宅についてのアンケートを学生と保護者に実施した結果を報告した。一応大学は地域の避難所となっているが、自分の大学の学生や保護者が大災害時にどのような避難行動をとるのか、また、望んでいるのかをより知らねばならないであろう。また、本当に南海トラフ大地震

が襲来する場合、大学が好むと好まざるとに関わらず、地域の住民は大学に避難してくるであろう。これは東日本大震災、熊本地震の例で明らかである。そうした場合、大学は単なる地域の避難所というだけでなく、多くの学生もまた大学に留まることになる。すると何が起ころかという、災害時には大学や学生は他の避難者と比べてどちらかといえば強い者、余力のある者となり、避難所におけるボランティア的なはたらきを期待されるのではなかろうか。こうしたことを予測して大学は一朝事ある時に備えておかねばならないであろう。

[引用文献] 森田匡俊 2013 大規模災害時における大学キャンパスからの帰宅意思に関する研究 愛知工業大学
地域防災研究センター 年次報告書 vol. 10/平成25年度